

◎ 第6学年理科についてのまとめ

- 第6学年になると、多くの科学用語が用いられ、児童にとっては抵抗が大きいものと考えられる。現象と関連させながら、その定着を図る必要がある。
- 実験・観察については、全体構造の中での位置づけや、それを指導するねらいを明らかにし、その上で児童の思考に沿った指導を、ひとつひとつ組織化する必要がある。
- 実験や測定の結果をわかりやすい表にしたり、グラフ化したり、また表やグラフから考察する能力を身につけることも大切である。
- A領域では、特に「体のつくりと働き」についての理解が不十分である。この教材では、できる限り観察実験を取り入れ、更に模型や視聴覚の方法を生かした指導が望まれる。
- B領域では、物の性質や変化の規則性を理解させるため、結果の知識を教えることを重視しがちであるが、検証の方法など学習の過程を大切にする指導も必要である。
- C領域では、太陽の動き・地表の変化など自然現象を総合的にとらえる力が弱い。ねらいを明確にして、継続観察ができるよう、また観測量相互の関連の理解を図るような指導の工夫が必要である。